



Title	昭和戦前期の普通選挙と北海道第5区
Author(s)	井上, 敬介
Citation	北海道大学文学研究院紀要, 161, 1(左)-34(左)
Issue Date	2020-12-18
DOI	https://doi.org/10.14943/bfhhs.161.l1
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/80042
Type	departmental bulletin paper
File Information	1001_bfhhs.161.l1.pdf



昭和戦前期の普通選挙と北海道第5区

井 上 敬 介

序

本論は、昭和戦前期の北海道第5区、すなわち、釧路、帯広市と河西（十勝）、釧路国、根室、網走支庁管内町村における普通選挙（1928年2月の第1回普通選挙から1937年4月の第5回普通選挙まで）の得票数を検討することで、候補者の選挙地盤と政党の勢力変遷を明らかにすることを目的としている。その際、以下の点に着目する。

第1に、第5区では立憲政友会と立憲民政党の影響力が強く、5度の衆議院議員選挙において、二大政党以外の候補が登場していない。政党内閣崩壊以降、道内の各選挙区では非政民勢力の進出が確認された。1937年4月の第5回普通選挙（林銑十郎内閣が実施）に着目すると、第2区では昭和会の林路一、第3区では東方会の渡辺泰邦、第4区では国民協会の赤松克磨と中立の北勝太郎が当選している（赤松以外は前回から連続当選）¹。道央北西部の第1区は二大政党以外の代議士が誕生していないが、労働農民党や中立の候補は存在したし、1936年8月の第11期北海道議員選挙では社会大衆党の正木清が1位当選を果たしていた。道東は道内で最も二大政党化が進展した地域だった。

第2に、第5区は道内において最も政友会の党勢が強力な地域だった。第1区は5区と同様、二大政党が対抗勢力の挑戦を退けたが、民政党が政友会に対する圧倒的優位を確立させていた²。第2区は政党内閣期において、5区と並ぶ政友会の金城湯池だったが、同党は政党内閣崩壊後の第4、5回普

10.14943/bfhhs.161.11

通選挙（同党を脱党した林が昭和会候補として当選）において、東武の1議席（連続1位）に終わった。第4、5回普通選挙における他の政友会候補に着目すると、第1区では岡田伊太郎（第4回、4位）と板谷順助（第5回、2位）、第3区では登坂良作（第4回、3位）と田代正治（第5回、3位）、第4区では南条徳男（3位と5位）の1議席だった。第4、5回普通選挙において、政友会が3議席と2議席を確保したのは第5区のみである。第5区には政友会中島派の領袖として政友会分裂に重要な役割を果たした木下成太郎（政友会北海道支部長）がいる一方で、政友会久原派の東条貞もおり³、第5区を検討することは、政友会分裂を北海道から考察する作業の一助となる⁴。

第3に、第5区は定員が4人にもかかわらず、道内最大の広域選挙区であり、地域社会の利害調整が困難な地域だった。例えば、1930年2月の第2回普通選挙（浜口雄幸内閣が実施）では「釧勝根北」（釧路、十勝、根室、北見地方）会議が紛糾し、与党の民政党の候補者調整を妨げる結果となった⁵。本論では、釧路市と釧路国支庁管内を「釧路地方」、帯広市と河西（十勝）支庁管内を「十勝地方」、根室支庁管内を「根室地方」、網走支庁管内を「北見地方」と定義する。

以降、本論では「二大政党間の競合」、「政友会内の派閥抗争」、「道東の地域間対立」の3つの側面から、北海道の地方新聞の検討を通して⁶、昭和戦前期の道東の政治状況の解明を試みる。

第1章 政党内閣期における北海道第5区

〔表1〕 第1～5回普通選挙における北海道第5区の候補者別得票数

候補者名	所属	結果	釧路市	帯広市	河西(十勝)支庁	釧路国支庁	根室支庁	網走支庁	合計
第1回普通選挙									
木下成太郎	政	当選	2,139		230	4,650	2,896	4,201	14,116
三井徳宝	政	当選	86		12,158	140	79	1,033	13,496
小池仁郎	民	当選	51		5,054	574	2,987	1,043	9,709
前田政八	民	当選	3,347		2,636	2,353	23	241	8,600
野坂良吉	民	落選	5		32	12	4	8,306	8,359
東条貞	政	落選	0		17	2	3	6,428	6,450
前田駒次	政	落選	6		6	25	0	5,378	5,405
第2回普通選挙									
東条貞	政	当選	9		31	55	6	15,073	15,174
木下成太郎	政	当選	2,409		119	5,124	3,123	2,020	12,795
小池仁郎	民	当選	82		4,751	701	5,044	1,614	12,192
三井徳宝	政	当選	141		9,803	229	57	222	10,452
吉野恒三郎	民	落選	41		365	159	38	9,580	10,183
遠山房吉	民	落選	162		7,991	174	27	1,011	9,365
菊地三之助	民	落選	3,591		770	2,921	38	324	7,644
第3回普通選挙									
三井徳宝	政	当選	271		16,423	540	296	1,514	19,044
尾崎天風	政	当選	79		145	131	10	18,186	18,551
木下成太郎	政	当選	3,622		129	7,214	5,155	2,141	18,261
小池仁郎	民	当選	2,066		1,861	2,481	4,659	740	11,807
吉野恒三郎	民	落選	142		129	112	14	10,292	10,689
遠山房吉	民	落選	532		8,285	497	63	962	10,339
第4回普通選挙									
南雲正朔	民	当選	4,591	965	3,143	5,308	462	2,927	17,396
東条貞	政	当選	245	197	749	488	130	14,456	16,265
三井徳宝	政	当選	42	1,896	12,991	96	84	113	15,222
尾崎天風	政	当選	7	17	43	21	14	15,057	15,159
木下成太郎	政	落選	2,587	51	227	5,901	3,090	1,082	12,938
梅谷周造	民	落選	128	395	1,288	445	6,471	2,603	11,330
田中一磨	民	落選	171	1,696	5,117	276	44	674	7,978
第5回普通選挙									
遠山房吉	民	当選	167	3,782	15,020	386	232	441	20,028
木下成太郎	政	当選	2,673	436	3,327	6,237	4,662	873	18,208
東条貞	政	当選	116	302	2,109	383	126	12,613	15,649
南雲正朔	民	当選	4,233	276	1,366	4,726	3,046	1,390	15,037
尾崎天風	政	落選	9	29	173	20	22	11,894	12,147
河西貴一	民	落選	13	84	123	54	34	8,028	8,336

〔表 2〕 北海道第 5 区の政党別得票数

釧路市	政	民	河西(十勝)支庁	政	民	釧路国支庁	政	民
(1)	2,231	3,403	(1)	12,411	7,722	(1)	4,817	2,939
(2)	2,559	3,876	(2)	9,953	13,877	(2)	5,408	3,955
(3)	3,972	2,740	(3)	16,697	10,275	(3)	7,885	3,090
(4)	2,881	4,890	(4)	14,010	9,548	(4)	6,506	6,029
(5)	2,798	4,413	(5)	5,609	16,509	(5)	6,640	5,166
帯広市	政	民	根室支庁	政	民	網走支庁	政	民
			(1)	2,978	3,014	(1)	17,040	9,590
			(2)	3,186	5,147	(2)	17,315	12,529
			(3)	5,461	4,736	(3)	21,841	11,944
(4)	2,161	3,056	(4)	3,318	6,977	(4)	30,708	6,204
(5)	767	4,142	(5)	4,810	3,312	(5)	25,380	9,859

(注) [表 1]～[表 7]において、「政」は立憲政友会、「民」は立憲民政党を指す。[表 2]～[表 7]において、(1)～(5)は第 1 回から第 5 回までの普通選挙を指す。なお、第 1～3 回普通選挙は河西支庁、第 4、5 回普通選挙は帯広市、十勝支庁。いずれも、「第十六回衆議院議員総選挙一覧」(衆議院事務局, 1928 年)、「第十七回衆議院議員総選挙一覧」(衆議院事務局, 1930 年)、「第十八回衆議院議員総選挙一覧」(衆議院事務局, 1932 年)、「第十九回衆議院議員総選挙一覧」(衆議院事務局, 1936 年)、「第二十回衆議院議員総選挙一覧」(衆議院事務局, 1937 年)から作成した。

第 1 節 第 1 回普通選挙における道東政治の二大政党化

1928 年 2 月の第 1 回普通選挙(田中義一政友会内閣が実施)における北海道第 5 区の当選者は政友会公認の木下成太郎(元代議士, 農業, 札幌市)と三井徳宝(道議, 金物商, 札幌市), 民政党公認の小池仁郎(前代議士, 北海道水産会会長, 根室町)と前田政八(道議, 木材業, 釧路市), 落選者は民政党公認の野坂良吉(道議, 漁業, 網走町), 政友会非公認の東条貞(道議, 農牧業, 網走町)と前田駒次(道議, 農業, 野付牛町)である([表 1])。政友会と民政党は 2 議席ずつ, 獲得している。

昭和戦前期の普通選挙と北海道第5区

〔表3〕 河西（十勝）支庁管内町村における政党別得票数

帯広町	政	民	川西村	政	民	大正村	政	民	幕別村	政	民
(1)	1,683	1,293	(1)	462	243	(1)	676	134	(1)	756	717
(2)	1,284	2,319	(2)	281	568	(2)	734	376	(2)	623	1,189
(3)	2,179	2,054	(3)	770	298	(3)	1,077	277	(3)	1,087	980
			(4)	642	356	(4)	1,072	519	(4)	985	981
			(5)	141	863	(5)	241	1,225	(5)	280	1,372
芽室村	政	民	清水村	政	民	御影村	政	民	新得村	政	民
(1)	876	631	(1)	556	608	(1)	353	175	(1)	567	384
(2)	434	1,203	(2)	360	973	(2)	233	356	(2)	437	679
(3)	725	1,101	(3)	790	653	(3)	430	226	(3)	810	342
(4)	1,012	665	(4)	698	727	(4)	414	216	(4)	763	438
(5)	106	1,653	(5)	387	970	(5)	120	492	(5)	250	883
鹿追村	政	民	士幌村	政	民	上士幌村	政	民	音更村	政	民
(1)	495	179	(1)	667	392				(1)	1,152	345
(2)	435	406	(2)	510	763				(2)	832	822
(3)	655	295	(3)	671	266	(3)	545	224	(3)	1,333	607
(4)	718	360	(4)	634	396	(4)	587	254	(4)	1,351	554
(5)	240	895	(5)	250	650	(5)	181	668	(5)	450	1,327
池田町	政	民	本別村	政	民	西足寄村	政	民	浦幌村	政	民
(1)	975	837	(1)	747	488	(1)	402	207	(1)	643	326
(2)	967	1,203	(2)	790	683	(2)	358	362	(2)	378	676
(3)	1,235	791	(3)	1,138	485	(3)	501	283	(3)	736	344
(4)	1,053	924	(4)	905	627	(4)	541	379	(4)	565	437
(5)	705	1,254	(5)	515	863	(5)	390	546	(5)	253	646
豊頃村	政	民	大津村	政	民	大樹村	政	民	広尾村	政	民
(1)	332	265	(1)	125	196				(1)	944	302
(2)	230	446	(2)	96	371	(2)	413	223	(2)	558	259
(3)	456	272	(3)	235	293	(3)	609	223	(3)	715	261
(4)	316	334	(4)	253	321	(4)	788	515	(4)	714	545
(5)	144	456	(5)	129	391	(5)	388	763	(5)	439	592

(注) 第1～3回普通選挙は河西支庁，第4，5回普通選挙は十勝支庁。帯広町に市制施行（1933年）。新得村と本別村，町制施行（1933年）。清水村，町制施行（1936年）。大正村と幕別村から一部が分村し，中札内村，更別村となる（1947年）。川西村と大正村，帯広市に編入（1957年）。御影村，清水町に編入（1956年）。西足寄村，足寄村と合併し，足寄町となる（1955年）。大津村は，浦幌町，大樹町，豊頃村に編入（1955年）。

〔表 4〕 釧路国支庁管内町村における政党別得票数

鳥取村	政	民	舌辛村	政	民	音別村	政	民	白糠村	政	民
(1)	339	449	(1)	589	414	(1)	340	229	(1)	367	255
(2)	430	530	(2)	882	572	(2)	438	283	(2)	381	350
(3)	729	359	(3)	1,158	319	(3)	508	273	(3)	621	279
(4)	631	761	(4)	766	766	(4)	413	384	(4)	608	435
(5)	594	704	(5)	592	529	(5)	316	342	(5)	577	363
足寄村	政	民	湊別村	政	民	釧路村	政	民	昆布森村	政	民
(1)	197	129	(1)	333	376	(1)	205	162	(1)	85	203
(2)	187	197	(2)	379	389	(2)	268	199	(2)	70	216
(3)	348	103	(3)	420	361	(3)	352	139	(3)	256	90
(4)	274	153	(4)	323	419	(4)	287	259	(4)	132	240
(5)	269	181	(5)	353	388	(5)	287	272	(5)	147	194
鶴居村	政	民	弟子屈村	政	民	熊牛村	政	民	標茶村	政	民
			(1)	261	29	(1)	339	109			
			(2)	251	128				(2)	377	266
			(3)	446	125				(3)	488	358
			(4)	633	555				(4)	489	487
(5)	350	220	(5)	592	439				(5)	559	485
太田村	政	民	厚岸町	政	民	浜中村	政	民			
(1)	84	64	(1)	1,094	237	(1)	575	280			
(2)	102	66	(2)	1,107	278	(2)	536	481			
(3)	152	75	(3)	1,299	254	(3)	908	355			
(4)	120	208	(4)	1,138	755	(4)	692	607			
(5)	146	178	(5)	1,123	500	(5)	735	371			

(注) 鶴居村、舌辛村から分村 (1937 年)。鳥取町と白糠町の一部、釧路市と合併 (1949 年)。舌辛村、阿寒村に改称 (1937 年)。阿寒町と音別町、釧路市に合併 (2005 年)。湊別村、十勝支庁に編入 (1948 年)、陸別村と改称 (1949 年)。昆布森村、釧路村と合併 (1955 年)。熊牛村、標茶村に改称 (1929 年)。太田村、厚岸町と標茶町に編入 (1955 年)。

1926 年に内務省警保局が作成した「改正法ニ依ル第一回総選挙予想調査」は、木下成太郎 (政友会) を「多年、政友会員トシテ政治問題ニ関連シ、現ニ政友会北海道支部長タリ。根室、網走両支庁管内及政友会員中ニ相当アリ」、「当落不明」、小池仁郎 (当時は憲政会) が「多年道会議員、代議士トシテ管内全般ニ亘リ相当信望アリ」、「当選確実」、前田政八 (当時は憲政会) が「現道会議員ニシテ釧路市ニ於ケル憲政派ノ牛耳ヲ執リ、勢力信望アリ」、「当

昭和戦前期の普通選挙と北海道第5区

落不明」，野坂良吉（当時は憲政会）は「北見一円ニ亘り，名望最モ高く信用亦厚シ」，「当落不明」，東条貞（政友会）は「網走町ノ一部ニアルノミニシテ其ノ他ニハ薄シ」，「当選見込ナシ」，前田駒次（政友会）は「多年道会議員トシテ網走町管内及政友会員中ニ相当アリ」，「当落不明」と評していた⁷。小池を除き，道東地域においては有力者の当選が確実視されていなかったことがわかる（三井の調査報告はない）。なお，釧路は木下の地盤と見なされていない。

〔表5〕 根室支庁管内町村における政党別得票数

根室町	政	民	和田村	政	民	別海村	政	民	標津村	政	民
(1)	1,251	1,438	(1)	288	190	(1)	170	164	(1)	596	349
(2)	1,052	1,953	(2)	180	399	(2)	307	413	(2)	882	841
(3)	1,699	1,509	(3)	307	317	(3)	821	958	(3)	1,201	702
(4)	1,141	2,130	(4)	181	432	(4)	653	1,138	(4)	658	1,064
(5)	1,321	965	(5)	264	188	(5)	838	645	(5)	1,010	527
植別村	政	民	羅臼村	政	民	歯舞村	政	民	色丹村	政	民
(1)	126	215				(1)	227	278			
(2)	132	321				(2)	191	399			
			(3)	204	239	(3)	385	396			
			(4)	98	337	(4)	282	588	(4)	13	97
			(5)	144	110	(5)	442	187	(5)	49	44
泊村	政	民	留夜別村	政	民	留別村	政	民	紗那村	政	民
(1)	130	158	(1)	116	69	(1)	32	61	(1)	29	59
(2)	221	381	(2)	88	253	(2)	46	109	(2)	60	67
(3)	412	313	(3)	174	193	(3)	147	37	(3)	71	60
(4)	160	507	(4)	23	324	(4)	50	169	(4)	30	158
(5)	358	246	(5)	129	199	(5)	124	88	(5)	93	103
薬取村	政	民									
(1)	13	33									
(2)	17	26									
(3)	40	12									
(4)	29	33									
(5)	38	10									

（注）和田村，根室町と合併し，根室市となる（1957年）。標津町から，中標津村が分村（1946年）。植別村，羅臼村に改称（1930年）。泊村，留夜別村は国後島。留別村，紗那村，薬取村は択捉島。

政友会が釧路地方への党勢を強化する嚆矢となったのは、政友本党系の釧路公正倶楽部の解散である。1927年9月30日、政友会は田中内閣の党勢拡張の一環として、小川平吉鉄相、政友会代議士の東武（農林政務次官）、松実喜代太、奥野小四郎、政友会北海道支部長の木下が釧路市を訪問、釧路政友倶楽部は大懇親会を開催した。釧路公正倶楽部の有力者は懇親会に参加し、釧路憲政同志会（憲政会）や中立の釧路市議は政友会に入党した。10月6日、釧路公正倶楽部幹部会は政友会への復帰を決定し、20日には会員250名を集めて臨時総会を開催した。同会は憲政会から政友会への政権交代の結果、田中内閣の積極政策の下で釧網線（釧路、網走間の鉄道）が速成されることを期待し、政友会に入党した⁸。釧網線の工事は網走側が先行し、網走、斜里間が1925年1月に開通していた。釧路側は1923年5月から工事が開始されていたが、憲政会政権の財政整理と事業縮小の下で規定工事費の配分が不足し、1927年の完成が1935年まで繰り延べられていた。1925年1月の釧路市民大会は釧網線速成建議要求の決議を行い、1926年1月には関係全町村を網羅した釧網線鉄道期成同盟会が組織されていた⁹。釧網線速成という地方利益要求が釧路公正倶楽部の政友会合流の背景にあったのである。

1928年1月30日、釧路国政友倶楽部（政友会）と釧路公正倶楽部は無条件合併し、釧路政友倶楽部となった。当初、政友会に復党した佐藤国司（元政友本党、旧釧路公正倶楽部の領袖）は立候補に意欲を示していたが、木下との共倒れを避けて出馬を辞退した。元来、木下は支部長でありながら、釧路、十勝、根室、北見地方のいずれにも強固な地盤を有していなかった¹⁰。前回選挙において、政友会の木下は第9区（網走、根室、釧路国、河西支庁管内）から立候補したものの、憲政会の小池と政友本党系中立の奥野の前に落選した¹¹。政友会は釧路公正倶楽部を吸収することで、木下に対して釧路地方という有力な地盤を提供したのである。

北見地方においては1927年6月の民政党の結党とともに、二大政党化の傾向が見られた。野付牛町に着目すると、『北見市史』は「昭和二年七月ごろには、北見地方における政党の活動も活発化し、野付牛政友倶楽部が鉄道用地交換、常呂川治水完成、区裁判所の誘致、郵便局昇格、墓地移転、産業立

町策、水道敷設など当時の町是に当たる政策の実現化を打ち上げるや、これに対抗した人々が政策論争を展開するために野付牛民政倶楽部の組織化をはかるなど、中央の二大政党政治の展開に即し、地方利益の実現を政党に属したり、政党代議士へ媒介することによって達成しようという動きも起こってきたのであった」と述べている¹²。政友会の支持者は屯田兵出身者が多く、農村を中心に「名望と根強い社会的実力」を保持していた。他方、民政党は「市街地で盛んに商工業を営む人士」であり、1927年の夏には永井柳太郎が小池の応援のため、政談演説会を行っている¹³。このように、野付牛民政倶楽部は地元（北見）の代議士を選出しようとせず、根室地方の実力者の小池（当選4回）との結びつきを深めていた。

〔表6〕 網走支庁管内町村における政党別得票数（1）

雄武村	政	民	興部村	政	民	西興部村	政	民	紋別町	政	民
(1)	330	295	(1)	507	300	(1)	200	336	(1)	570	337
(2)	273	336	(2)	610	275	(2)	360	286	(2)	651	498
(3)	550	254	(3)	803	291	(3)	417	250	(3)	1,033	438
(4)	826	140	(4)	979	167	(4)	543	142	(4)	1,478	358
(5)	740	179	(5)	966	144	(5)	521	141	(5)	1,637	419
渚滑村	政	民	下渚滑村	政	民	滝上村	政	民	上湧別村	政	民
(1)	677	205				(1)	693	417	(1)	548	301
(2)	624	298				(2)	542	539	(2)	622	343
(3)	792	337				(3)	901	373	(3)	659	419
(4)	699	45	(4)	354	38	(4)	1,095	190	(4)	1,067	116
(5)	613	60	(5)	310	48	(5)	1,006	197	(5)	896	266
下湧別村	政	民	遠軽村	政	民	生田原村	政	民	佐呂間村	政	民
(1)	618	315	(1)	1,141	546	(1)	274	309	(1)	675	298
(2)	848	422	(2)	1,174	806	(2)	343	290	(2)	806	310
(3)	1,062	415	(3)	1,397	778	(3)	413	214	(3)	962	337
(4)	1,348	173	(4)	2,177	308	(4)	745	152	(4)	1,325	119
(5)	1,133	298	(5)	1,797	472	(5)	564	294	(5)	1,217	214

（注）遠軽村、町制施行（1934年）。渚滑村と上渚滑村、紋別町と合併し、紋別市となる（1954年）。下湧別村、湧別町と改称（1953年）。上湧別町、湧別町と合併（2009年）。白滝村と丸瀬布村、遠軽町から分村（1946年）。生田原町、白滝村、丸瀬布村、遠軽町と合併（2005年）。

1928年2月の第1回普通選挙における政党別得票結果を見ると、田中内閣の与党の政友会の得票は、河西、釧路国、網走支庁管内において、民政党を上回った。他方、釧路市と根室支庁管内では民政党が政友会を上回っている（〔表2〕）。河西支庁管内では清水、大津村を除く全町村において、政友会が民政党を上回った（〔表3〕）。釧路国支庁管内では鳥取、湊別、昆布森村を除く全町村において、政友会が民政党を上回っている（〔表4〕）。根室支庁管内では和田、別海、標津、留夜別村を除く全町村において、民政党が政友会を上回った（〔表5〕）。網走支庁管内では網走町と西興部、生田原、置戸、小清水村を除く全町村において、政友会が民政党を上回った（〔表6〕、〔表7〕）。政権与党の優位性を考慮しても、政友会の党勢は圧倒的である。

ここで、候補者別の得票数から、選挙結果を検討する。釧路市に着目すると、政友会は木下、民政党は前田政八に集票している（〔表1〕）。河西支庁管内では政友会が全町村において三井に集票した。他方、民政党は川西、大正、清水、鹿追、音更、本別、大津、広尾村において小池に集票したが、上記以外の町村では前田政八との同士討ちとなった。釧路国支庁管内では政友会が全町村において木下に集票した。他方、民政党は鳥取、舌辛、音別、白糖、釧路、昆布森、弟子屈村において前田政八に集票したが、上記の町村以外では小池との同士討ちとなった。根室支庁管内では全町村において政友会が木下、民政党が小池に集票した。網走支庁管内では、政友会が雄武、興部村において木下、野付牛町と端野、相内、訓子府村において前田駒次、美幌、網走町と津別、女満別、小清水、斜里村において東条に集票した。木下が北見地方に侵入していたことがわかる。他方、民政党は野付牛町と端野、相内村を除く全町村において野坂に集票している。ただ、上記3町村では民政党候補の中で小池が1位である¹⁴。

十勝地方の政友会に着目すると、2月2日の『北海タイムス』は三井と前代議士の奥野小四郎（政友本党系、農牧業、帯広町）の対立を報じ、「十勝の政友、遂に二分か」と評している。同紙によると、「奥野氏直系ともいふべき畜産組合及び郡農会幹部及び旧憲政系にて中立の立場に入る農政協会側の有志とは策動して奥野会なるものを組織」していたと言う。同日の十勝政友俱

〔表7〕 網走支庁管内町村における政党別得票数（2）

野付牛町	政	民	端野村	政	民	相内村	政	民	留辺蘂町	政	民
(1)	2,656	556	(1)	700	93	(1)	514	88	(1)	875	305
(2)	1,811	1,434	(2)	454	346	(2)	392	233	(2)	771	519
(3)	2,793	1,276	(3)	694	215	(3)	514	194	(3)	967	492
(4)	3,266	871	(4)	881	140	(4)	599	77	(4)	1,365	301
(5)	1,302	2,580	(5)	525	476	(5)	383	227	(5)	1,126	459
常呂村	政	民	置戸村	政	民	訓子府村	政	民	津別村	政	民
(1)	347	249	(1)	326	628	(1)	550	361	(1)	506	392
(2)	400	187	(2)	420	616	(2)	565	384	(2)	601	617
(3)	502	171	(3)	508	560	(3)	621	395	(3)	644	570
(4)	642	57	(4)	767	340	(4)	860	167	(4)	1,079	349
(5)	632	64	(5)	431	662	(5)	515	340	(5)	853	489
美幌町	政	民	女満別村	政	民	網走町	政	民	小清水村	政	民
(1)	1,097	295	(1)	457	288	(1)	1,337	1,548	(1)	438	467
(2)	996	643	(2)	531	384	(2)	1,829	1,590	(2)	608	383
(3)	1,276	542	(3)	572	430	(3)	1,866	1,823	(3)	713	412
(4)	1,816	334	(4)	956	155	(4)	3,004	875	(4)	1,008	188
(5)	1,475	529	(5)	778	221	(5)	2,944	623	(5)	986	154
斜里村	政	民									
(1)	1,004	661									
(2)	1,084	790									
(3)	1,182	808									
(4)	1,829	402									
(5)	2,030	304									

（注）野付牛町，北見市となる（1942年）。相内村，北見市と合併（1956年）。端野町，留辺蘂町，常呂町，北見市と合併（2006年）。東藻琴村，網走町から分村（1947年）。女満別町，東藻琴村と合併し，大空町となる（2006年）。小清水村から，上斜里村が分村（1943年）。上斜里村，清里町に改称（1955年）。

楽部の協議会（帯広町で開催）は「我党天下に結束一きわ強固となれると，第二期殖産計画案に附帯する積極政策に共鳴して党勢頓に揚れる矢先とて，五百余名の役員出席，何れも緊張の氣勢は漲っている」状況にあった。同協議会において，帯広町は奥野を推したが，同士討ちを避けるために「奥野，三井両氏の忌憚なき意見を聴取し，猶大勢の趨向を尊重する為，各村より三名の委員を挙げ，其報告を明三日，役員会を再会報告して候補決定」するこ

ととなった。翌3日の同会において、奥野は三井推薦の経過を報告し、「一同感動し、三百余名の役員一致にて三井徳宝氏を政友会候補として推薦すること」を決定した¹⁵。奥野派の不満は帯広町議の経験がある三井の現住所が東京にあり、十勝の地元候補ではなかったことにある。15日の『釧路新聞』は「民政派は三井候補を以て地元でなく輸入である。同じ輸入ならお隣釧路の前田候補へ、縁故の深い小池候補へとも言つて居る。而してこの輸入候補云々も本月二三日の協議会で奥野系の口にしたもので之も民政派に乗ぜしめた」、「帯広町大通に三井金物店がある。この金物店こそ三井氏の経営したもので、現在舎弟の熊七氏が其衝に当つて居る。又、其店舗のれんが造りこそ、帯広町における近代様式建築物の最初である如く、三井君は十勝の先駆者として活動したものだ。且つ其後に於いても十勝と三井との関係は切れたのではないが、しかし、若い帯広の人々、十勝の人々にはピタリと来ない所のあつたのも否定し得ない。即ち之が輸入候補云々、民政派に乗ぜしめた一原因である」と報じている¹⁶。

釧路地方に着目すると、2月4日の『北海タイムス』によると、2日の釧路政友倶楽部の総会（200名以上が参加）は「市内は勿論郡部から有力者馳せ集まり、近年稀に見る氣勢を挙げた」と言う。同会について、4日の『小樽新聞』は「合体した釧路の政本両系、木下成太郎氏を推薦す。分裂危機を免れて」と報じている¹⁷。根室地方に着目すると、1月29日、根室政友倶楽部の役員会（50名が参加）は、満場一致で木下の推薦を決定した¹⁸。木下の当選の背景には、釧路、根室政友倶楽部の結束があつた¹⁹。なお、木下は言論戦よりも文書戦を重視しており²⁰、この戦略が的中し、1位当選を果たした。

民政党では、十勝地方において、候補者擁立を巡る混乱があつた。1月27日の『北海タイムス』は「民政派として小池氏は先に十勝新報を機関紙として地盤開拓を企てて来たが、野村对小川一派の確執は依然として深刻を極め、小川氏一派は盛んに反小池熱を煽り来た結果、局面展開を見、芽室の民政一派と策動して遠山房吉氏を擁立せんと目論見居るも、遠山氏の内情は果たして蹶起すべきやと頗る疑問視され」と報じている²¹。野村文吉ら小池派と小川常次郎ら反小池派の対立が深刻なものであつたことがわかる。

同日の十勝民政倶楽部の候補者推薦協議会において遠山は出馬を断念し、小池の推薦を決定した。だが、遠山派は釧路の前田政八を推し、候補者調整は2月2日の「四ヶ国幹部会」（釧路、十勝、根室、北見）に委ねられた。4日の『小樽新聞』は「席上、例の容易に結ばれなかった小川、野村両氏の手打ちをなした結果、小川氏は遠山道議と共に前田氏を応援すること」を決定したと報じた²²。なお、1日の『釧路新聞』は、「池田、本別方面の民政派有志も小池氏より、前田氏を担がんとするもの相当多い」と報じている。15日の同紙は「芽室の如き遠山君の関係から、民政派の金城湯池であり、而かも其の七分は前田君に投ぜられるものであらう」と観測している²³。

小池が形勢不利にもかかわらず、十勝に進出した背景には根室における声望の低下があった。2月1日の根室民政倶楽部は満場一致で小池の擁立を決定した²⁴。4日の『釧路新聞』は「小池派は幾分立ち遅れの感あり。有権者の一部には釧路の前田氏に対し、好感を懐くものすらあり」、20日の同紙は「小池候補は根室の不振を挽回するは十勝にあるのみとの意気込みを以て最終の努力を続け、昨夜は帯広町栄楽座に於いて政見発表演説会を開催」したと報じている。さらに、28日の同紙は「小池君第一の損失は根拠地根室の動揺、第二の損失は従来の選挙に於て根室に次ぐ地盤とされて居たる釧路から前田君の立候補、第三の損失は全般的に漸く人気の転換傾向、顕著となり来たれることを挙げねばならない」と評し、「遂に多年何人も一指も染め得ざりし根室水産会長の椅子から時もあらうに本月十五日、選挙の真最中に政友派の為に蹴落とされて了つた」と報じている²⁵。標津村長の植松適を政友会系という理由で小平薬村長に転出させるなど、小池の強引さが²⁶、根室地方の有権者の反感を買っていたのだろう。結果的に小池の十勝進出は成功し、得票において前田政八を大きく上回った（〔表1〕）。だが、28日の『釧路新聞』は「若し十勝地元候補として民政派から有力者が現はれたら如何なる現象を呈するか計り難い」と観測している²⁷。視点を換えると、前田政八が対立する釧路の地元候補ゆえに、十勝の民政党員は支援を躊躇し、第3者の小池を支持したのではないか。22日の『釧路新聞』は釧路市における前田政八と木下の得票結果について、「前田候補は地元丈に幾らか強味があつた」と評してい

る²⁸。だが、釧路の長所は十勝の短所となったように思われる。

十勝、釧路、根室地方では、政友会の集票力が発揮されたが、同党の誤算は、北見地方だった。1月23日の北見政友倶楽部の総会は満場一致で東条を推したにもかかわらず、24日の野付牛政友倶楽部の総会（野付牛、留辺蘂町と端野、相内、置戸、訓子府村から100名が参加）は、前田駒次を擁立した²⁹。政友会は両者を公認しなかった³⁰。2月17日の『釧路新聞』によると、木下支部長は「野付牛を全く度外に置く能はず、同時に政友の元老たる前田駒次氏を推すが順序なるを以てこの方針を取り、遂に前田氏公認、東条氏非公認となった」と言う³¹。木下の決定は公平さを欠くため、本部の裁定によって両者非公認となったのだろう。9日の同紙は東条について「最初は新興勢力に乗じて非常の勢ひであつたが、幸か不幸か公認候補になり得ざりし為め、多少予想裏切られたるの観ある。然し網走、女満別、斜里、小清水方面の勢力侮り難い」と報じている³²。他方、民政党は野付牛町の千葉平蔵（道議、新聞業）が「野坂の奴、不埒だ。俺に一言の挨拶もない。野坂と対抗の為に立つ」と述べていたが、小池の斡旋で出馬を断念した、だが、千葉は「俺は野坂を落とす」と、政友会の前田駒次と東条よりも自党の野坂を攻撃し、小池と前田政八を支援した³³。20日の同紙は「千葉君が飽くまで野坂君を眼の敵とし、落選運動に努力したことは党の統制上から見て、決して賞すべきではない」と評している³⁴。

政民両党ともに、網走町と野付牛町との対立を克服できなかった。1月30日の『釧路新聞』は「網走と野付牛とは長い間の勢力争覇戦を継続し、先に支庁移転問題あり。最近には公認競馬場の設置争奪があつた。かかる有様なるを以つて網走、野付牛は両立せず、随つて如何に党本位であり、党の統制が行き届くと言ひながら、網走の候補者に野付牛の有権者が投票せず、又野付牛の候補者に網走の有権者亦同様である」と報じた³⁵。野付牛町は網走町からの支庁移転にともなう利益（土木現業所、営林区署、裁判所の所在地となり、人口増加）を期待していた³⁶。東条、前田駒次、野坂はいずれも落選し、北見選出代議士は誕生しなかった。北見地方における政民両党の党勢の差は歴然としており、候補者調整に成功していれば、政友会の3議席獲得は

容易だっただろう³⁷。地方別に見ると、釧路の前田政八は北見の野坂を僅差で上回って当選しており³⁸、前田を支持した十勝の遠山は釧路側に「貸し」をつくることになった。

1928年2月の第1回普通選挙において、第5区では与党の政友会が北見地方の豊富な得票を活かすことができず、民政党と2議席を分け合った。地元候補別では、十勝0、釧路1、根室1、北見0という結果となった。北見は道東の中で最大の有権者を有しながら、地元代議士を選出することができなかった。十勝は政友会の三井が当選したが、地元候補選出という課題は、次回以降に持ち越される。

第2節 第2回普通選挙における道東の地域対立

1930年2月の第2回普通選挙（浜口雄幸民政党内閣が実施）における北海道第5区の当選者は政友会公認の東条（道議）と木下（前代議士）、三井（前代議士）、民政党公認の小池（前代議士）、落選者はいずれも民政党候補で、公認の吉野恒三郎（道議、無職、野付牛町）と菊地三之助（道議、会社員、釧路市）、非公認の遠山房吉（農業、芽室村）である（〔表1〕）。政友会は前回選挙から1議席増の3議席、民政党は1議席減の1議席となった。

政党別得票結果を見ると、浜口内閣の与党の民政党の得票は、釧路市、河西、根室支庁管内において、政友会を上回った。他方、釧路国、網走支庁管内では野党の政友会が民政党を上回っている（〔表2〕）。河西支庁管内では大正、鹿追、音更、本別、大樹、広尾村を除く全町村において、民政党が政友会を上回った（〔表3〕）。釧路国支庁管内では鳥取、足寄、湊別、昆布森村を除く全町村において、政友会が民政党を上回っている（〔表4〕）。根室支庁管内では標津村を除く全町村において、民政党が政友会を上回った（〔表5〕）。網走支庁管内では雄武、置戸、津別村を除く全町村において、政友会が民政党を上回った（〔表6〕、〔表7〕）。

候補者別の得票数に視点を移す。釧路市に着目すると、政友会は木下、民政党は菊地に集票している（〔表1〕）。河西支庁管内では前回選挙と同様、政友会が全町村において三井に集票した。他方、民政党は芽室、御影、新得、

鹿追、音更村において遠山、大津、広尾村において小池に集票したことを除き、両者の同士討ちとなった。釧路国支庁管内では前回選挙と同様、政友会が全町村において木下に集票した。他方、民政党は厚岸町と鳥取、舌辛、音別、白糠、釧路、昆布森、太田、浜中村において菊地に集票したが、上記以外では同士討ちとなった。根室支庁管内では前回選挙同様、全町村において政友会が木下、民政党が小池に集票した。網走支庁管内では、政友会が野付牛、紋別町と雄武、端野、相内村を除く全町村において東条に集票した。他方、民政党は野付牛町と雄武、佐呂間、端野、相内村を除く全町村において吉野に集票した³⁹。

上記の結果から、政友会の勝因が民政党の同士討ちにあったことは明らかだろう。1月25日、根室民政倶楽部は小池の推薦を決定したが⁴⁰、十勝、釧路地方では状況が異なった。釧路の菊地が小池（民政党の選挙対策を担っていた安達謙蔵内相の側近）の推薦で民政党本部の公認を受けたことに対して、十勝の遠山が反発した⁴¹。遠山が本部から疎まれたのは反小池派だったからだろう⁴²。30日、道東の民政党員は地盤協定を行うため、「釧勝根北四ヶ国会議」を帯広町に開催した（根室から小池を含む3名、釧路と北見から各6名、十勝から遠山を含む36名の代表者が出席）。民政党北海道支部代表の出町初太郎道議は「十勝と釧路と協定の上、一名だけ擁立し、必勝を期せしめん」と要請したが、遠山派は納得しなかった。そこで、北見の意見を入れて各地方から3名ずつ委員を挙げて協議したが、31日に決裂した⁴³。2月1日の釧路民政同志会の臨時総会は「釧勝根北四ヶ国会議」の経過を踏まえた上で菊地の推薦を決定した。他方、遠山は「地元有権者の熱烈なる応援」を理由に、民政党北海道支部の勇退勧告を拒否した。3日の十勝本別民政同志会の幹部会は小池、四日の十勝幕別同志会は遠山、5日に発会した池田民政同志会は小池を推薦し⁴⁴、菊地は十勝からの支援を受けることができなかった。遠山が非公認で立候補した結果、菊地当選の可能性はほぼ絶たれたと言えるだろう。同時に、十勝は小池を支持する勢力も根強く、遠山の立候補は無謀だった。

北見地方の民政党もまた、「釧勝根北四ヶ国会議」の影響を受けていた。1

月28日の北見民政党の協議会（網走町）には、「佐呂間、常呂、斜里、訓子府、美幌、留辺蘂、上生田原、遠軽、上湧別、下湧別、紋別、野付牛、津別、雄武、網走各倶楽部代表」50余名が参加し、候補者選定（野坂か吉野）に関して、本部一任を決定した⁴⁵。同日の民政党留辺蘂倶楽部の総会は「地元公認候補」を応援することで一致した。30日の北見民政倶楽部の幹部会（民政党湧別支会主催）は、満場一致で吉野の推薦を決定した⁴⁶。だが、2月4日の野付牛民政倶楽部の幹事会では「北見管内の中、旧野付牛の六ヶ町村を割いて、小池候補に譲つたのは、四ヶ国会議に於て決定せる地盤の協定に依るものである」という意見が出たが、吉野は「私も四ヶ国会議に出席した一人であるが、会議には全然、地盤の協定は附議されなかった。散会后、星、仁尾、北島の三氏が小池候補等と会見して非公式に定めたもので公の決定でない」と反論した。形勢不利を悟った小池派は退場し、「四ヶ国会議の協定は之を認めず」という決議が行われた。2月6日の『北海タイムス』は「旧野付牛管内の六ヶ町村の中、端野、相内は小池候補擁護、多数を占め、留辺蘂、置戸、訓子府は大体、吉野候補支持に傾いて居る」と評している。さらに、7日の北見佐呂間村民政倶楽部の幹部会は小池を推薦し、北見連合大会の合意は破綻した⁴⁷。選挙結果を見ると、野付牛町、端野、相内、佐呂間村では吉野が628、183、101、175票、小池が583、145、128、90票と拮抗していた⁴⁸。小池との同士討ちの代償は大きく、吉野は僅差で落選した（〔表1〕）。

上記のように、民政党本部は候補者調整に失敗した。前回選挙において十勝は釧路の前田政八を支援しており、本来は釧路が十勝に譲歩するべきだった。だが、釧路の菊地は民政党本部の公認許可を盾に譲らず、非公認で立候補した十勝の遠山との共倒れとなった。北見の吉野の落選の背景には、野付牛町と周辺村の一部有志が根室の小池を支持したためだった。「釧路根北四ヶ国会議」が決裂したことで、小池は危機感を持ち、野付牛町有志に接触した。遠山が辞退し、菊地だけが立候補していれば、十勝からの支持を得た小池は安全圏に入り、吉野の地盤の北見を脅かす必要もなくなり、2議席の獲得は確実だっただろう。民政党本部が菊地ではなく、遠山を公認していても同様だったように思われる。だが、後者の場合、小池は釧路の支持を得ら

れるが、十勝という有力な票田を失う。十勝が釧路の2倍以上の有権者を有することを考慮すれば、小池の当選を確実にするためには、遠山の辞退が必要だった。だが、そのことは、釧路への対抗意識を持ち、地元候補擁立を企図する多くの十勝民政党員の意向に反するものだった。

対照的に、政友会は、十勝、釧路、根室地方において地方組織が集票に成功した。十勝地方では2月4日の十勝政友倶楽部の臨時総会（800人が参加）がわずか5分の協議で三井の推薦を決定、釧路地方では1月29日の釧路政友倶楽部の総会が満場一致で木下の推薦を決定した⁴⁹。

しかし、北見地方に着目すると、2月1日の「旧野付牛管内政友倶楽部の幹事会」は「北見管内の中堅、野付牛を割いて、木下候補を応援する条件の下に東条氏が公認された顛末を報告し、一致、木下候補応援に協力されたい」と要請したが、留辺蘂町と訓子府村は「前回の代議士戦に於いて、東条、前田の両地元候補が枕を並べて戦死したのは木下氏が四千票余の多数を北見からとつたからで、木下候補は第五区管内全般に亘り、勢力あり。当選の安全地帯に居るのだから、比較的微力である地元候補の東条氏を一致、応援すべきである」と反論した⁵⁰。第2回普通選挙の結果を見ると、野付牛町、端野、相内村において、東条が966, 196, 212票、木下が729, 228, 170票と拮抗していた⁵¹。木下は野付牛方面における集票に成功していないが、反東条勢力も看過できない。木下と東条の対決の背景には道東の地域間対立（釧路対北見）だけではなく、北見地方の中の地域対立（網走対野付牛）もあったのである。東条が1位当選を果たした背景には、「東条会」（本部は網走町）という個人後援会の活動があった⁵²。道議時代から、東条は雄弁家として著名であり、政党の幹部を主力として戦う従来の戦術を取らず、県人の縁故と青年層を中心とする選挙戦を展開していた⁵³。1月27日の『北海タイムス』は「前回の轍を踏んで共倒れの悲運を繰り返すことなきを保せず、政党色濃厚ならざる多数有権者は挙国一致、政党政派を超越して北見の代議士を選出せんとの機運、濃厚となりつつあり、当選の可能性ある候補を応援すべし」という機運を報じている⁵⁴。前回選挙において北見地方のみ、代議士が誕生しなかったことも東条進出の要因として重要だろう。

1930年2月の第2回普通選挙において、第5区では地盤協定に失敗した与党の民政党が1議席に終わり、政友会は野党でありながら、3議席を獲得した。地元候補別では、十勝0、釧路0、根室1、北見1という結果となった。十勝、釧路ともに、地元候補の当選に失敗した。両者の対立は政党間競合にまで波及し、道東における民政党の敗北をもたらした。小池は選挙戦直後の2月25日、山田勝伴に送付した礼状の中で「我党候補の濫立は同志討ちを免れるざる為、老生最不利の窮境に陥り、難戦苦闘続け居候」、「新進之同士枕を並べて落選の不幸を見たるは全国の戦蹟に比し、何共申訳無之、畢竟老生不徳の致処と慚愧の至に御座候。殊に根室十勝両支庁管内には道会議員もなき事と故、老の責任一層重大なるを痛感致居り候」と述べている⁵⁵。道東からの民政党の党勢後退は決定的となったのである。

第3節 第3回普通選挙における東条貞の出馬辞退

1932年2月の第3回普通選挙（犬養毅政友会内閣が実施）における北海道第5区の当選者は政友会公認の三井（前代議士）、尾崎天風（樺太林業株式会社、札幌市）、木下（前代議士）、民政党公認の小池（前代議士、前通信政務次官）、落選者は民政党公認の吉野（道議）と遠山である（〔表1〕）。なお、木下は1930年12月から1940年7月解散まで政友会北海道支部長を務める⁵⁶。政友会の3議席と民政党の1議席は、前回選挙から変化していない。

政党別得票結果を見ると、犬養内閣の与党の政友会の得票は、釧路市、河西、釧路国、根室、網走支庁管内において、民政党を上回っている（〔表2〕）。河西支庁管内では芽室（遠山の地元）、大津村を除く全町村において、政友会が民政党を上回った（〔表3〕）。釧路国支庁管内では全町村において、政友会が民政党を上回っている（〔表4〕）。根室支庁管内では根室町と標津、泊、留別、紗那、薬取村において政友会、和田、別海、羅臼、歯舞、留夜別村において民政党が上回っている（〔表5〕）。網走支庁管内では置戸村を除く全町村において、政友会が民政党を上回った（〔表6〕、〔表7〕）。

候補者別の得票数に着目すると、釧路市では政友会が木下、民政党が小池に集票している（〔表1〕）。河西支庁管内では過去2回の選挙と同様、政友会

は全町村において三井に集票した。他方、民政党は池田町と大津村を除く全町村において、遠山に集票した。釧路国支庁管内では過去2回の選挙と同様、政友会が全町村において木下に集票した。他方、民政党は釧路地方から候補を出さず、鳥取、足寄、湊別村を除く全町村において小池に集票した。根室支庁管内では過去2回の選挙と同様、全町村において政友会が木下、民政党が小池に集票した。網走支庁管内では、政友会が野付牛町と端野、相内、女満別村を除く全町村において尾崎、民政党が雄武村を除く全町村において吉野に集票した⁵⁷。

十勝地方に着目すると、政友会と民政党の候補者擁立過程は対照的だった。政友会では奥野小四郎が出馬を辞退し⁵⁸、2月7日の政友会十勝支部の総会が三井擁立を決定した。他方、8日の『北海タイムス』によると、民政党は野村派が依然として小池を推しており、遠山は「公認候補となつたものの、以前、同派一致の支持を得ず、前回非公認で出馬した当時と殆ど変りない陣容」だった。同紙は遠山について、「一般的に前回落選の悲運に泣かされた同情があり、且同候補は全道土功組合連合会実行委員としてその救済運動に携はれた縁故を以て十勝の水田地区に極力侵入の作戦に出づる共に、秋田木材の村田氏の縁故を利用してその事業関係を中心勢力として北見に突撃すべく、五十五回の政見発表演説会の中、二十回までも北見のそれに充てる等、相当優勢を伝えられている」と評している⁵⁹。民政党政権時代の1931年8月20日、遠山は北海道庁管内土功組合連合会実行委員の1人として、土地改良費の減額に反対していた⁶⁰。農村救済運動の実績は遠山の声望を高め、十勝地方の得票は前回選挙から増大している。他方で、北見地方への進出には失敗した（〔表1〕）。

釧路、根室地方に着目すると、政友会は1932年2月3日の釧路政友倶楽部の総会と根室政友倶楽部の臨時総会が木下の推薦を決定した。他方、民政党は1月22日から釧路民政同志会が地元候補の菊地の擁立を企図していたが、候補者調整を企図する本部によって30日には出馬辞退に追い込まれた⁶¹。この結果、釧路、根室地方では、政友会が木下、民政党が小池への集票に成功した。

北見地方に着目すると、政友会は前代議士の東条、尾崎のいずれかを擁立するかで紛糾した。1月27日の『北海タイムス』によると、26日の北見政友倶楽部の連合会は24か町村の代表者（120名）が「地元候補として東条、尾崎両氏の中、何れを取るかについて協議せるが、議論沸騰して纏まらず」、28日の『小樽新聞』は「網走方面から出席の代表者は東条氏を推薦して譲らず、又野付牛、紋別方面の代表多数は尾崎天風氏を推し、これに木下成太郎氏までが出て激論となり、その結果、東条、尾崎両氏をあげ、同連合会は白紙を以て本部に一任することとなり」と報じた⁶²。これに反発したのが東条の個人後援会である。東条会の幹部は「尾崎氏との協約問題、それは我々の興り知る所ではない、東条氏の起つことは解散直後、北見五千の東条会員は夫れ夫れ通知を出し、其の立候補は既定の事実となつてゐるに、今さら立候補を中止するとか、断念するとかいふことは北見五千の東条会員の承知せぬ所であるので、本人の諾否を問はず、東条会から推薦し、二十八日、立候補の手続きを終わった。本部へは極力公認方を運動しているが、たとへ、非公認でも飽くまで当選を期して戦ふ決心である」と語っていた⁶³。尾崎は常呂村に居住経験はあるが、北見の地元代議士ではなく、東条会の反発はここにあったように思われる。結局、東条は立候補を辞退し、尾崎を支持した。このことは、東条の個人後援会と政友会北海道支部（木下）との遺恨となつたように思われる。他方、民政党では1月22日の北見民政連合会が野坂を推薦したが、野坂は固辞し、吉野の出馬が決定した⁶⁴。

上記のように、民政党は候補者調整に成功したが、金解禁政策の破綻と野党への転落という退勢を挽回できず、道東各地で敗北を重ねた。例えば、木下は立候補に際して「殊に民政党の十政綱中、金輸出禁止の解除は一部資本階級の私腹を肥やしたるに反し、国民生活は極度に疲弊困憊して商業貿易の途は梗塞し、農商工業は衰退し、遂に失業者続出して又路傍に横はるという現状を呈しました」と演説している⁶⁵。

1932年2月の第3回普通選挙において、北海道第5区では前回選挙の教訓を活かした民政党が候補者調整に成功したが（小池、遠山、吉野）、財政政策の破綻を喧伝する与党の政友会の前に敗北した。政友会は3議席を維持し、

民政党は1議席に終わった。同年6月23日、小池は民政党を脱党し（直後、国民同盟に合流）、第5区における同党の議席は皆無となる⁶⁶。三井（十勝）、木下（釧路、根室）、尾崎（北見）は各地域に強力な地盤を持つが、地元候補ではない。地域別では、十勝0、釧路0、根室1、北見0という結果となった。

第2章 政党内閣崩壊後における北海道第5区

第1節 第4回普通選挙における木下成太郎の落選

1936年2月の第4回普通選挙（岡田啓介内閣が実施）における北海道第5区の当選者は民政党公認の南雲正朔（弁護士、釧路市）、政友会非公認の東条（道議）、政友会公認の三井（前代議士）と尾崎（前代議士）、落選者は政友会公認の木下（前代議士）、民政党公認の梅谷周造（道議、運送業、根室町）、民政党非公認の田中一磨（弁護士、帯広市）である（〔表1〕）。政友会の3議席と民政党の1議席は依然として、変化がない。

政党別得票結果を見ると、岡田内閣の与党の民政党は釧路、帯広市と根室支庁管内において政友会を上回った。野党の政友会は十勝、釧路国、網走支庁管内において、民政党を上回った（〔表2〕）。十勝支庁管内では清水、豊頃、大津村を除く全町村において、政友会が民政党を上回った（〔表3〕）。釧路国支庁管内では鳥取、湊別、昆布森、太田村（民政党が上）と舌辛村（政民同数）を除く全町村において、政友会が民政党を上回っている（〔表4〕）。根室支庁管内では民政党が全町村において政友会を上回った（〔表5〕）。網走支庁管内では政友会が全町村において民政党を上回っている（〔表6〕、〔表7〕）。

候補者別の得票数を見ると、釧路市では、政友会が木下、民政党が南雲に集票している。帯広市では政友会が三井に集票にしたことに対して、民政党は田中と南雲の同士打ちとなった（〔表1〕）。十勝支庁管内では過去3度の選挙と同様、政友会は全町村において三井に集票した。他方、民政党は本別町と清水村を除く全町村において、田中に集票した。釧路国支庁管内では、過去3度の選挙と同様、政友会が全町村において木下に集票した。他方、民

政党は浜中村を除く全町村において、南雲に集票した。根室支庁管内では全町村において政友会が木下、民政党が梅谷に集票した。網走支庁管内では、政友会が紋別町と雄武、西興部、渚滑、下渚滑、下湧別、佐呂間、常呂村において尾崎、網走町と津別、女満別村において東条に集票した。尾崎と東条の対立は深刻である。他方、民政党は紋別町と興部、西興部、上湧別、下湧別において梅谷、野付牛町と端野、津別村において南雲に集票した⁶⁷。

上記のように、政友会は十勝地方の得票を固めることで三井の当選に成功したが、釧路、根室地方の得票を固めた木下は落選した。東条と尾崎は北見地方において同士討ちを展開したにもかかわらず、ともに当選した。木下は東条が非公認で立候補した犠牲になったと言えるだろう。さらに、民政党が地元候補の南雲を擁立したことで、釧路市の木下の得票は前回選挙から減少した（〔表1〕）。2月21日の『旭川新聞』は木下の落選について、「結果を見るならば、予想外に東条氏の台風の進出と政友会の唯一の金城湯池である釧路市に新興勢力に乗つて、雷の如く輩出した若冠、南雲正朔氏によつて票田を攪乱された結果と見られている。以上による木下氏の思はざる落選？に政友支部幹部は、極度に狼狽している」と報じている⁶⁸。古川隆久氏は木下の落選の一因として国体明徴運動に傾注し、政友会の支持基盤の農村問題を閑却したことを挙げている⁶⁹。木下は昭和会の内田信也鉄相の選挙支援を受けており⁷⁰、政友会北海道支部内には木下への反発もあったように思われる。

ここでは、政友会の同士討ちに着目する。2月7日の『旭川新聞』は東条について「非公認とはいひながら、青年政治家として新聞記者出身の同氏は文章を能くし、弁論の雄として、北見の若き青年有権者から相当の支持がある」と評した⁷¹。北見7か町村（紋別町と渚滑、上渚滑、滝上、雄武、興部、西興部村）からなる紋別政友倶楽部は尾崎の支援を決定したが、政友会上斜里倶楽部は東条を推した⁷²。紋別、湧別、遠軽方面は尾崎の地盤が固く、東条の侵入を許さなかった。13日の同紙は、「殊に紋別方面、遠軽方面の選挙区は勿論、従来民政クラブ幹事の重要な位置にあつた有志も一致協力して応援演説をなしている」と報じている⁷³。政友会の尾崎を支持する北見の民政党員が存在したのである。同紙は、尾崎の武器が「北見地方民は自分にとって

は生みの親であり、育ての親である」という信念であり、「尾崎候補は過去四年間の代議士生活において、「どんな仕事でも喜んで引き受けてくれる」といふ観念を北見人に植えつけた。茲に氏の金城湯池が築かれている」と評している⁷⁴。札幌市在住の尾崎は北見の地元候補ではないが、地域住民への影響力は看過できないものがあつた。尾崎の「本隊は北見西部を、縦貫別働隊は全部で十三隊を組織」していた⁷⁵。他方、東条は非公認ゆえに政友会の地盤協定に拘束されなかった。尾崎と木下は三井の地盤の十勝への進出を自重していたが、東条は十勝を奇襲した⁷⁶。東条の勝因は北見地方以外からも得票を得る事が可能だったからだろう。

民政党に着目すると、当初の南雲には党籍がなく、公認を得るために入党した。十勝民政支会が推薦した田中は民政党の公認を得られず、釧路と十勝との関係は悪化した⁷⁷。民政党は南雲と小池（国民同盟から民政党に復党）のみを擁立することで「釧路、十勝の連携」を企図し、2議席を確保しようとしていたが⁷⁸、小池の急死によって混乱した。1月24日、小池の訃報が道東の民政党員に伝えられたが⁷⁹、民政党北海道支部長の山本厚三の推薦を受け、梅谷が後継者として立候補したのは31日だった。民政党には道議の林弥八（雑貨商、網走町）を擁立しようという運動もあつたが⁸⁰、北見地方から候補者を擁立することはなかった。梅谷と田中は公認候補争いを展開し、民政党北海道支部は梅谷を選択⁸¹、田中は非公認で立候補した。田中の立候補の背景には小池が新人の立候補を妨げているという十勝の民政党員の反感があつた⁸²。帯広市と網走支庁管内の得票状況に象徴されるように、3者の地盤協定は成立していない（[表1]）。南雲は小池の生前から地盤協定を進めており、いち早く釧路地方の支持票を固めることに成功していた。なお、南雲は梅谷の地元の根室地方に関して協定を遵守していたが、十勝地方には進出した。この結果、南雲に得票が集中することになり、梅谷と田中は犠牲となった。

政党内閣崩壊以降においても、道東は、町村議選レベルまで、二大政党間の対立が激化していた。例えば、本別町では1933年5月31日の町会議員選挙において、政友会系の戊申倶楽部と民政党系の革新倶楽部が公認候補を擁

立、激しく競り合った⁸³。津別村では、同年11月9日の村会議員選挙において下相生教授場存廃問題をめぐり、存続派の政友会（医師の佐々木千太郎ら）が廃止派の民政党との抗争を制した⁸⁴。

1936年2月の第4回普通選挙において、第5区では民政党が与党でありながら1議席に終わり、野党の政友会が3議席を維持した。地元候補別では、十勝0、釧路1、根室0、北見1という結果となった。釧路は第1回普通選挙以来の地元代議士を得た。1937年2月、三井の選挙違反が発覚し、木下が繰り上げ当選となる。だが、東条が政友会の非公認で立候補し、木下を落選させたことは同党の内部抗争の観点から重要であろう。さらに、十勝に影響を持つ小池の急死と三井の後退は政党間競合に変動をもたらすとともに、十勝の結束を固めることになる。

第2節 第5回普通選挙における十勝民政党の結束

1937年4月の第5回普通選挙（林銑十郎内閣が実施）における北海道第5区の当選者は民政党公認の遠山（道議）と南雲（前代議士）、政友会公認の木下（前代議士）と東条（前代議士）、落選者は政友会公認の尾崎（前代議士）と民政党公認の河西貴一（道議、料理業、野付牛町）である（〔表1〕）。民政党は1議席増の2議席、政友会は1議席減の2議席で、二大政党は同数となった。道東においても他の選挙区と同様、民政党の攻勢が見られる。

政党別得票結果を見ると、政友会は釧路国、根室、網走支庁管内において、民政党を上回った。他方、民政党は釧路、帯広市と十勝支庁管内において政友会を上回っている（〔表2〕）。十勝支庁管内では全町村において、民政党が政友会を上回った（〔表3〕）。民政党の議席拡大は、十勝地方への党勢拡大によるところが大きい。釧路国支庁管内では鳥取、音別、湊別、昆布森、太田村を除く全町村において、政友会が民政党を上回っている（〔表4〕）。根室支庁管内では留夜別、紗那村を除く全町村において、政友会が民政党を上回った（〔表5〕）。網走支庁管内では野付牛町（河西の地元）と置戸村を除く全町村において、政友会が民政党を上回っている（〔表6〕、〔表7〕）。

候補者別の得票数を見ると、釧路市では、政友会が木下、民政党が南雲に

集票している。帯広市では政友会が集票に失敗したこと（木下対東条）に対して、民政党は遠山に集票した（〔表1〕）。十勝支庁管内では池田、本別町と幕別、西足寄、浦幌、豊頃、大津、広尾村において木下、清水、新得町と御影、鹿追、士幌、上士幌、音更村において東条に集票した。十勝では木下と東条の対立が激化している。他方、民政党は全町村において、遠山に集票した。釧路国支庁管内では、過去4度の選挙と同様、政友会が全町村において木下に集票した。他方、民政党は足寄、渚別村を除く全町村において、南雲に集票した。根室支庁管内では全町村において政友会が木下、民政党が南雲に集票した。網走支庁管内では、政友会が紋別町と雄武、興部、西興部、渚滑、下渚滑、滝上村において尾崎、美幌、網走町と置戸、津別、女満別村において東条に集票した。北見の政友会票は尾崎と東条に二分された。他方、民政党は、紋別、遠軽、野付牛、留辺蘂、美幌町と西興部、上湧別、下湧別、生田原、佐呂間、端野、相内、常呂、置戸、訓子府、津別、女満別村において河西に集票した⁸⁵。

民政党の勝因は、十勝地方において遠山、釧路、根室地方において南雲に集票したことにある。田中が遠山を応援したことで十勝の民政党員は結束し⁸⁶、民政党と政友会の党勢は逆転した。他方、地元候補の河西の擁立は北見地方の得票を固める結果となり、東条と尾崎の得票を削ぐことに成功した。政友会は釧路、根室地方において木下に集票する一方で、北見地方では東条と尾崎が相手の根拠地を衝くという「悲壮の同士討ち」を展開し⁸⁷、釧路地方では木下と南雲による「一騎討ち」が展開された。木下は4月24日で地方遊説を止め、25日から札幌市に戻り、政友会北海道支部長として全道の指揮に当たった⁸⁸。この結果、28日の『旭川新聞』は「木下太閤、最後の政戦」、「木下苦戦」と報じている⁸⁹。木下と東条は、ともに十勝地方に進出することで当選した。尾崎は北見以外の地方に支持票を持たず、落選した（〔表1〕）。16日の『小樽新聞』が「根室地方の情勢は政民とも地元候補を出せない関係上、大体、南雲、木下両派と合流する情勢」と評したように⁹⁰、根室の地元代議士擁立運動はなかった。

当初、民政党の地方組織では、遠山（十勝）と南雲（釧路、根室）との地

盤協定が進められていた。4月8日の『旭川新聞』によると、5日の民政党十勝支会は「釧路南雲正朔氏と地盤協定の上、十勝民政派が一致結束して遠山氏を援け、必勝を期するべきである」いうことで一致した⁹¹。11日の同紙は、「南雲氏擁立をする釧路民政同志会では既に幹部会を開いて、実行運動の具体的打ち合わせをなし、更に十勝側が防戦態度に呼応する正攻めの運動について協議、結局前回同様、根室民政と合流、釧根両地の確票を基礎に、十勝民政地盤に接近を試みる筈で、この点、十勝民政派との地盤協定を見ることとなる」と評している。12日に民政党北海道支部の幹部会が河西（北見）を擁立したために遠山の公認が一時保留となるなどの混乱があったが⁹²、3名の公認で決着した。他方、政友会は「畜産組合並びに農会関係等の強力なバックを持つ」帯広市の奥野小四郎（道議）を三井の後継者として立候補させようという運動があったが、奥野の固辞によって実現せず⁹³、十勝から候補を送ることができなかった。この結果、木下と東条は十勝への進出が可能となった。

他方、南雲は地盤協定を破り、十勝に進出した。4月21日の『旭川新聞』（北見、十勝、釧路、根室、日高胆振版）は「勢ふ木下、東条両候補、十勝政友票田突入、地元遠山派又同志南雲派の挟撃受け、第三期戦劈頭の乱陣」と大きく報じている⁹⁴。遠山は「あくまで地元候補として十勝の票田確保により、当選の栄冠を獲得しやうといふ策戦から他管内への進出は見合わせて十勝地区に全力をそそぐ」戦略を取っていたが、南雲には「十勝管内より驚異的得票を見た」前回選挙の成果があった⁹⁵。これに対して、遠山は24日から遊説日程を変更し、26日から29日まで十勝の39か所に言論陣を布き、必死の防戦に努めた。本別町の川人源市は遠山に同情し、別に遊説隊一班を編成し、25日から同町を中心に言論陣を布いた⁹⁶。南雲の進出は結果的に十勝の民政党員の結束を強化し、遠山の1位当選を後押ししたのである。

1937年4月の第5回普通選挙において、政友会と民政党は2議席を分け合った。地元候補別では、十勝1、釧路1、根室0、北見1という結果となった。十勝は遠山という地元候補を初めて得た⁹⁷。民政党は十勝に党勢を拡大させる一方で、政友会は北見の強固な地盤を維持するとともに根室に党勢を

拡大させた。2年後の政友会分裂まで視野に入れると、道東政治は民政党(遠山と南雲)、政友会中島派(木下)、政友会久原派(東条)に3分されたと。なお、木下は1942年4月の翼賛選挙に立候補せずに引退したため⁹⁸、「最後の政戦」となった。

結

最後に、昭和戦前期の選挙結果から、道東における有権者の投票行動を地域ごとに整理する。

釧路市に着目すると、第3回普通選挙を除き、民政党が政友会を上回った。帯広市においても、2度の選挙において民政党が政友会を上回った([表2])。道東においても、都市部に強い民政党の特性は発揮されている。

河西(十勝)支庁管内に着目すると、1級町村は町から市に発展した帯広をはじめ、村から町に発展した新得、本別、清水、さらには池田町と川西、大正、幕別、芽室、音更村が挙げられる。2級町村は御影、鹿追、士幌、上士幌、西足寄、浦幌、豊頃、大津、大樹、広尾村である。大津村は全5回の選挙において、民政党が得票1位となった。本別町(村)と大正、鹿追、音更、大樹、広尾村は政友会(第1、2、3、4回普通選挙)から民政党(第5回普通選挙)という得票の移動が見られる。1937年4月の第5回普通選挙を機に、十勝の有権者の支持は政友会から民政党へと移行した。

釧路国支庁管内に着目すると、1級町村は厚岸町と浜中村、1933年に2級町村から移行した鳥取村にすぎない。舌辛、音別、白糠、足寄、湊別、釧路、昆布森、鶴居、弟子屈、標茶(熊牛)、太田村は2級町村である。厚岸町と白糠、釧路、弟子屈、標茶(熊牛)、浜中村は全5回の選挙において、政友会が得票1位となった(鶴居村は第5回普通選挙のみで1位)。音別村は政友会(第1、2、3、4回普通選挙)から民政党(第5回普通選挙)、太田村は政友会(第1、2、3回普通選挙)から民政党(第4、5回普通選挙)という得票の移動が見られる。釧路国支庁管内は政友会の金城湯池だが([表2])、一部地域では同党からの離反がはじまっていたように思われる。

根室支庁管内に着目すると、1級町村は根室町のみであり、和田、別海、標津、羅臼（植別）、歯舞、色丹、泊、留夜別、留別、紗那、藻取村は2級町村である。羅臼（植別）と歯舞村は、民政党（第1、2、3、4回普通選挙）から政友会（第5回普通選挙）への得票の移動が見られる。

網走支庁管内に着目すると、1級町村は紋別、野付牛、留辺蘂、美幌、網走町と1934年に2級町村から移行した遠軽町（同時に町制施行）と端野、相内村で、雄武、興部、西興部、渚滑、下渚滑、滝上、上湧別、下湧別、生田原、佐呂間、常呂、置戸、訓子府、津別、女満別、小清水、斜里村は2級町村である。紋別、留辺蘂、美幌町、遠軽町（村）と興部、渚滑、滝上、上湧別、下湧別、佐呂間、端野、相内、常呂、訓子府、女満別、斜里村は全5回の選挙において、政友会が得票1位となった（下渚滑村は第4、5回普通選挙で1位）。野付牛町のみ、政友会（第1、2、3、4回普通選挙）から民政党（第5回普通選挙）への得票の移動が見られる。

道東においては、4つの地域社会（十勝、釧路、根室、北見地方）の自立性が強く、地域間の対立が政党間競合に影響を与えた。地元候補擁立を要請する十勝、釧路間の対立だけではなく、北見の内部対立（網走町対野付牛町）は二大政党の候補者調整を困難なものとした。道東の地域社会間の対立は政党内閣崩壊以降の政友会の党内抗争にも影響を及ぼし、木下成太郎（釧路、根室地方）と東条貞（北見地方）は決裂する。1939年4月の政友会分裂の際、木下が中島派の中核となったことに対して、東条は久原派に加担した⁹⁹。上記のことは、北海道第5区における両者の対立に基因する。1928年2月の第1回普通選挙において、東条は政友会から公認されず、北見地方における豊富な得票が活かすことなく、落選した。1932年2月の第3回普通選挙において、東条は個人後援会（東条会）の意向に反してまで、候補者調整のために出馬を辞退した。対照的に、1936年2月の第4回普通選挙においては東条が非公認で立候補して当選し、木下は政友会北海道支部長でありながら、落選した。釧路、北見地方は政友会の金城湯池ゆえに、党内抗争の舞台となったのである。他方、民政党は小池仁郎の急死によって根室地方からの党勢を後退させたが、同時に十勝地方の民政党員を結束させ、1937年4月の第5回普

通選挙においては、反小池派の地元候補の遠山房吉を当選させた。

1942年4月の翼賛選挙（太平洋戦争中、東条英機内閣が実施）において北海道第5区から当選したのは、旧民政党の黒沢西蔵（元道議）と南雲正朔（前代議士）、旧政友会の東条（前代議士）と奥野小四郎（元道議）であり、いずれも推薦候補だった。旧政友会の尾崎天風（元代議士）は非推薦で立候補したが、次点で落選した¹⁰⁰。道東は依然として、旧二大政党が強固な地盤を有していたのである。

注

- 1 拙稿「昭和戦前期の北海道第2区における政党間競合」『北大文学研究院紀要』（158）2019年、拙稿「昭和戦前期の普通選挙と北海道第4区」『北大文学研究院紀要』（160）2020年を参照。第3区に関しても別稿を用意している。
- 2 拙稿「昭和戦前期の普通選挙と北海道第1区」『道歴年報』（20）2019年を参照。
- 3 拙著『戦前期北海道政党史研究』北海道大学出版会、2019年、第7章。木下の経歴については古川隆久『政治家の生き方』文芸春秋、2004年、第5章を参照。
- 4 中央政治における政友会については、奥健太郎『昭和戦前期立憲政友会の研究』慶應義塾大学出版会、2004年、古川隆久「日中戦争期の前田米蔵」『史学雑誌』（128-6）2019年。民政党については、拙著『立憲民政党と政党改良』北海道大学出版会、2013年。
- 5 前掲・拙著『戦前期北海道政党史研究』124、125頁。
- 6 本論においては、北海道大学附属図書館所蔵マイクロフィルム『北海タイムス』を『北タイ』、北海道大学附属図書館所蔵マイクロフィルム『小樽新聞』を『樽新』、北海道立図書館所蔵マイクロフィルム『釧路新聞』を『釧新』、旭川市中央図書館所蔵マイクロフィルム『旭川新聞』を『旭新』と略記し、年月日のみ表記する。
- 7 内務省警保局「改正法ニ依ル第一回総選挙予想調査」1926年、『昭和初期政党政治関係資料』（第1巻）不二出版、1988年、22～23頁。
- 8 黒坂博『釧路地方政党史考』（下）釧路市、1986年、48、46、47頁。
- 9 田中和夫『北海道の鉄道』北海道新聞社、2001年、206頁。
- 10 前掲・黒坂『釧路地方政党史考』（下）58～64頁。
- 11 前掲・拙著『戦前期北海道政党史研究』42頁。
- 12 北見市史編さん委員会編『北見市史』（下巻）北見市、1983年、422頁。
- 13 同上、423、425、422頁。
- 14 前掲「第十六回衆議院議員総選挙一覧」。

- 15 『北タイ』(1928年2月2, 4, 5日)。
- 16 『釧新』(1928年2月15日)。
- 17 『北タイ』(1928年2月4日), 『樽新』(1928年2月4日)。
- 18 『北タイ』(1928年1月31日)。
- 19 厚岸政友倶楽部の木下支援も確認される(『釧新』(1928年2月15日))。
- 20 『釧新』(1928年2月20日)。
- 21 『北タイ』(1928年1月27日)。
- 22 『樽新』(1928年1月28, 29日, 2月1, 4日)。
- 23 『釧新』(1928年2月1, 15日)。
- 24 『樽新』(1928年2月3日)。
- 25 『釧新』(1928年2月4, 20, 28日)。
- 26 中標津町五十年史編さん委員会編『中標津町五十年史』中標津町, 1995年, 116頁。
- 27 『釧新』(1928年2月28日)。
- 28 『釧新』(1928年2月22日)。
- 29 『樽新』(1928年1月25, 30日)。『北タイ』(1928年1月26日)。
- 30 『樽新』(1928年2月6日)。野付牛町には小池の支持者が多かった(『樽新』(1928年2月19日))。
- 31 『釧新』(1928年2月17日)。
- 32 『釧新』(1928年2月9日)。
- 33 『釧新』(1928年2月17日)。
- 34 『釧新』(1928年2月27日)。
- 35 『釧新』(1928年1月30日)。
- 36 山谷一郎『網走私史』(第2集)出版社不明, 1995年, 176, 177頁。
- 37 『釧路新聞』は「二対二は民政の成功, 候補者乱立の政友」と報じている(『釧新』(1928年2月27日))。
- 38 開票当日の野坂事務所では当選の祝杯をあげていたが, 最後, 前田政八に追い抜かれたと言う(網走市史編纂委員会編『網走市史』(下巻)網走市役所, 1971年, 1054頁)。
- 39 前掲「第十七回衆議院議員総選挙一覧」。
- 40 『樽新』(1930年2月1日)。
- 41 候補者調整を巡る道東の民政党の紛糾については, 前掲・拙著『戦前期北海道政党史研究』125頁でも述べたが, 本論ではより詳細に検討したい。
- 42 『旭新』(1930年2月10日)。
- 43 『樽新』(1930年2月1日), 『北タイ』(1930年2月1日)。
- 44 『樽新』(1930年2月1, 6, 7日)。
- 45 『北タイ』(1930年1月30日)。
- 46 『樽新』(1930年1月30日, 2月3日)。

- 47 『北タイ』(1930年2月6日), 『樽新』(1930年2月9日)。
48 前掲「第十七回衆議院議員総選挙一覧」。
49 『樽新』(1930年2月3, 5日)。
50 『北タイ』(1930年2月3日)。
51 前掲「第十七回衆議院議員総選挙一覧」。
52 前掲『網走市史』(下巻)1053頁。
53 前掲・山谷『網走私史』(第2集)158頁。
54 『北タイ』(1930年1月27日)。
55 「選挙に関する手紙」(山田勝伴宛小池仁郎葉書)北海道立図書館所蔵「山田文庫」(3701)。
56 前掲・古川『政治家の生き方』151頁。
57 前掲「第十八回衆議院議員総選挙一覧」。
58 前掲・拙著『戦前期北海道政党史研究』144頁。
59 『北タイ』(1932年2月5, 8日)。
60 藤森四平編『北海道土功組合史』北海道土功組合連合会, 1938年, 815頁。
61 『北タイ』(1932年2月5日), 『樽新』(1932年1月25日, 2月5日)。
62 『北タイ』(1932年1月27日), 『樽新』(1932年1月28日)。
63 『樽新』(1932年1月29日)。
64 『樽新』(1932年1月23, 25日)。
65 木下成太郎先生伝刊行会編『木下成太郎先生伝』みやま書房, 1967年, 111, 112頁。
66 松枝大貴「昭和戦前期における第三党に関する一考察」『慶應義塾大学大学院法学研究科論文集』(57)2017年, 240頁。1933年8月には、国民同盟の安達謙蔵と中野正剛が党勢拡張のため、北海道を訪れた(『北タイ』(1933年8月12日))。
67 前掲「第十九回衆議院議員総選挙一覧」。
68 『旭新』(1936年2月21日)。
69 前掲・古川『政治家の生き方』157頁。
70 戦後、木下三四彦は「昭和九年、岡田内閣のとき、鉄道大臣になってくれといわれたのです」、「このときも断わり、その代わりに内田信也さんを推したので、内田さんが岡田内閣の鉄道大臣になられたのです。内田さんはひじょうに感激され、まもなく来道されると、兄の選挙区で、兄をほめる演説をされました。このときわたしも途中まで同行しましたので、いまでもそのときの様子を思い出すことができます」と回顧している(木下三四彦「木下成太郎／政友会の大御所」北海道総務部文書課編『北海道回想録』北海道, 1967年49頁)。結果的に、内田鉄相の応援は木下の不利に作用したように思われる。
71 『旭新』(1936年2月7日)。
72 『旭新』(1936年1月25日, 2月8日)。

- 73 『旭新』(1936年2月13日)。
- 74 『旭新』(1936年2月13, 16日)。
- 75 『旭新』(1936年2月17日)。
- 76 『旭新』(1936年2月15日)。
- 77 『旭新』(1936年1月23, 24, 25日)。南雲擁立の背景には、前田政八以来の地元候補擁立という釧路市からの要請があった(『旭新』(1937年4月5日))。
- 78 『樽新』(1936年1月25日)。
- 79 『旭新』(1936年1月26日)。
- 80 『旭新』(1936年1月26日, 2月3日)。
- 81 『旭新』(1936年2月7日)。
- 82 『旭新』(1936年2月9日)。
- 83 本別町史編さん委員会編『本別町史』本別町役場, 1977年, 229, 230頁。
- 84 津別町百年史編さん委員会編『津別町百年史』津別町, 1985年, 98, 99頁。
- 85 前掲「第二十回衆議院議員総選挙一覧」。
- 86 前掲・拙著『戦前期北海道政党史研究』215頁。
- 87 『旭新』(1937年4月25日)。
- 88 『旭新』(1937年4月24日)。
- 89 『旭新』(1937年4月28日)。
- 90 『樽新』(1937年4月16日)。
- 91 『旭新』(1937年4月8日)。
- 92 『旭新』(1937年4月8, 11, 13日)。
- 93 『旭新』(1937年4月7, 13日)。
- 94 『旭新』(1937年4月21日)。
- 95 『旭新』(1937年4月22日)。
- 96 『旭新』(1937年4月26日)。
- 97 遠山は1939年3月17日、現職のまま、病死する(芽室町編『芽室町八十年史』芽室町役場, 1957年, 110頁)。
- 98 前掲・古川『政治家の生き方』157頁。
- 99 前掲・拙著『戦前期北海道政党史研究』第7章を参照。
- 100 「第二十回衆議院議員総選挙一覧」(衆議院事務局, 1942年)。

Universal suffrage in the pre-war era of the Showa period And the fifth constituency of Hokkaido

Inoue Keisuke

This paper is a sequel to my paper “Universal suffrage in the pre-war era of the Showa period and the fifth constituency of Hokkaido”, consider course of changes of the competition between two-parties in the fifth constituency of Hokkaido in the pre-war era of the Showa.

This paper revealed the facts that political situation of the east of Hokkaido made progress two-parties.

Firstly, the voter in the fifth constituency of Hokkaido in the pre-war era of the Showa voted for the local candidate.

Secondly, this paper discovered an independence of community in the fifth constituency of Hokkaido in the pre-war era of the Showa.

Examples of the fifth constituency of Hokkaido in the pre-war era of the Showa prove the importance in the research on universal suffrage in the pre-war era of the Showa period and political parties. Communal society community